認知心理学と教育
―若き認知心理学者たちへのメッセージ―

教育学部実験心理学講座 ❖ 森 敏昭

認知心理学とは

「認知心理学」という学問をご存知でしょうか？ もちろん、生まれた子を自分の子と「認知」するかどうかという、あのややこしい「心理」を研究している学問ではありません。認知心理学とは、知識獲得、文章理解、推理、問題解決、意思決定など人間の「認知」過程の仕組みを研究している心理学の一分野なのです。

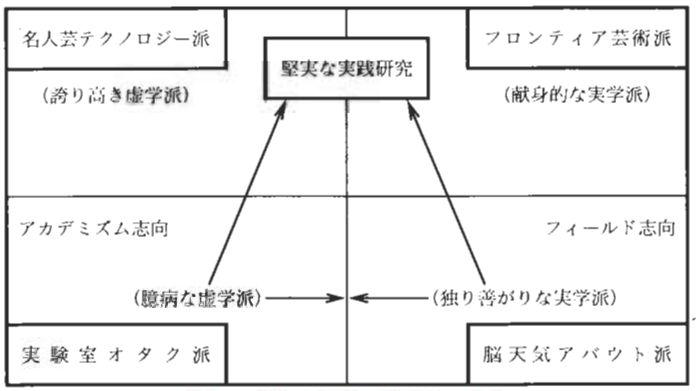

図1　教育心理学の不毛性の図式

教育心理学の不毛性

認知心理学は、日本では一九七〇年代の後半ぐらいから次第に盛んになってきた（まだ学会もない）新しいパラダイムです。これに対し、「教育心理学」は（すでに一九五二年に学会が創設されている）老舗のパラダイムです。

ところが、どういうわけか日本の教育心理学の評判はあまり芳しくないようです。日本の教育心理学の内部には、どうやら不毛性の図式が成立してしまったようなのです（図1を参照）。その責任は「臆病な虚学派」と「独り善がりな実学派」にある、というのが私の分析です（詳しくは『授業研究21』の八月号を参照）。

要するに、前者はアカデミズムの高みから後者を一段低く見下し、後者は前者の虚学性を告発するという反目の図式が、不毛性の元凶だと思うのです。

若い認知心理学者たちが教育を語り始めた

「こんなことではいけないんじゃないの？」と、若い認知心理学者たちが教育を語り始めたのは嬉しいことです。認知心理学はまだ若々しいパワーに溢れたパラダイムなので、「制度疲労」で閉塞状態に陥ってしまった日本の教育心理学の世界に、風穴を開けることができるかもしれないからです。そうすればきっと、教育心理学者の発したメッセージが、もっとよく教育現場に届くようになるはずです。

その証拠に、『若き認知心理学者の会』の発した熱いメッセージ（『認知心理学者 教育を語る』（北大路書房））は、教育現場の隅々にまで届いているようではありませんか。

若き認知心理学者の自己変革

しかし、若き認知心理学者たちは、そこで留まっているべきではありません。留まることは古くなることであり、頑なになることであり、やがてまた「不毛」の烙印を押されることになるからです。時代が変わり、社会が変わり、学校も変わろうとしている今日、若き認知心理学者たちも常に自己変革を続けなければならないのです。

その自己変革のための第一歩として次になすべきことは、勇気を奮い起こし、もう一歩深く教育の世界に踏み込んでみることではないでしょうか。

つまり、今度は教育現場というフィールドに立って、もう少し具体的に教科の教育について語ってみるべきだと思うのです。

認知心理学の視点から「教科教育」を語るためには

しかしながら、「教科教育」という具体的な問題を語るからには、もう「独り善がり」であることは許されません。今度は認知心理学の真価が問われることになるからです。だから、気を引き締めて掛からねばなりません。

「教科教育」を語るからには、「教科教育」の専門家や日々「教科教育」を実践しておられる先生がともすれば見落としてしまいがちな、心理学ならではの論点なり視点なりを提起することが大切です。それができなければ、心理学者が「教科教育」を語ることの意味はないのです。

しかも、もう「臆病」であることも許されないのです。ジャーゴンの鎧で身を固め、アカデミズムの世界に閉じこもっていたのでは、いつまで経っても不毛の烙印を消し去ることはできないからです。

幸い、認知心理学はまだ若いパラダイムです。その「若さ」を武器にして、思い切って「教育」というフィールドに討って出ようではありませんか。

失敗を恐れるのは、もう止めることにしましょう。何事にも果敢に挑戦してみることが、「若さ」に与えられた唯一の特権なのですから。

プロフィール

（もり・としあき）
◇福岡県に生まれる
◇広島大学教育学部助教授（文学博士）
◇一九七六年　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期（教育心理学専攻）中途退学
◇専攻　認知心理学（記憶・文章理解）
◇特技　謡曲（観世流）
◇愛読書　NHK「趣味の園芸」
◇《一言メッセージ》
今までは「人生二毛作」の裏作だったのだ、ということにして、そろそろ表作に取りかかろうかと考えています